



Title	ゲーテの反形而上学
Author(s)	山田, 貞三; Yamada, Teizo
Citation	独語独文学研究年報, 31, 208-215
Issue Date	2004-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26170
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P208-215.pdf



ゲーテの反形而上学

山田貞三

ニュートンの光学批判に端を発したゲーテの『色彩論』は、その表題が示している通り、色彩についての論考であるが、色彩は当然ながら光がなくては生じない。ゲーテの言葉に拠ると、それは「光と光ならざるもの」¹の対立、境界によって条件付けられた光と人間の眼の生理的な機能との相互作用から生まれることになる。しかし、この書物の緒言を読むと、ゲーテは光そのものについて考察することをことさらに忌避しているように見える。その理由は、いかにも素っ気なく先ず次のように述べられている。「色彩について論じようとするなら、何よりもまず光のことから始めるべきではないか、と当然のことながらお尋ねになる方がおられよう。だがそれに対しては、これまですでに光についてはいろいろたくさんの方が語られてきており、そこで言われたことをここでも繰り返してみたり、もう何度もうり返されたことに、いまさら何かをつけ加えてみても始まるまい、と率直かつ簡単におこたえしておきたい」²。実際、光とは何かという問い、光の本質規定が『色彩論』の中で問題になることはけっしてない。光それ自体は、一切の翳りも境界ももたない透明な明るみであり、自ら現象することなくすべての存在を現象せしめるもの、いわばカントの「もの自体」のような存在だとも言える。そのような光の超越性をゲーテは問わない。ゲーテにとって問題になるのは、あくまでも条件付けられた光、さまざまな条件下で現象する多彩な光の作用、すなわち、色彩を帯びた光である。この引用した文章につづく箇所では彼はさらにこう述べている。「というのも、ある事物の本質をそのまま表現しようとしても、およそ実を結んだためしがないからである。だが、作用を認識することはできるし、この作用を洩れなく述べれば、その本質を包括したことになるかもしれない」³。ゲーテが光そのものを考察対象としないほんとうの理由は、ここにある。光よりも闇こそがこの世界の支配者なのだ、というメフィストの台詞（『ファウスト』1350-58）は、こうしたゲーテの考え方を詩的に形象化したものと言えるだろう。「わたしはあの闇の一部分なのです。闇こそが光を生んだのですが / 高慢な光はいまや母なる夜からそのふるき優位を / その支配権を奪おうとしています / けれどもそれが上手くいくことはありません いくらあがこうとも / 光は物体にとらえられ 物体にしがみついているほかないのですから」。

しかし、こうした言葉の意味する射程は、単に色彩研究の方法論にとどまらない奥行きをもっている。光は、西欧の文化史、とりわけキリスト教的な形而上学の歴史においては、つねに <絶対的な真理> のメタファーとして語り継がれてきた。西欧哲学の概念史をメ

¹ Goethe: Zur Farbenlehre. In: Werke, Hamburger Ausgabe (HA) XIII, S. 489. 日本語訳は、『色彩論』高橋義人・前田富士男訳、工作舎 1999 に拠っている。

² Ebd., S. 315.

³ Ebd.

タファーとの関連から考察したブルーメンベルクは、「真理のメタファーとしての光」⁴という論文の中で、このメタファーは、プラトンにあってはまだ「存在と真理の連関の自然性」として表現され、「最高の形式における認識とは、働くことなく休まっている観照、テオリアから発現する」⁵と指摘しているが、しかし、あの洞窟の比喩に認められるように、善のアイデアを象徴する太陽の光は、すでにプラトンにおいても形而上学的な超越のうちに「場所を占めることになる」⁶とも述べている。キリスト教神学にいたっては、この光のメタファーに認められた存在と真理の自然な関係は完全に払拭されてしまう。なぜなら聖書に記されているように、光は神の被造物にすぎず、神が光の支配者となり、神こそが光、すなわち真理そのものに他ならないからである。そこに恩寵や啓示という観念も必然的に生じてくる。このようなキリスト教形而上学の基本的な考え方に基づいた真理の光は、やがてガリレイやデカルトあるいはベーコンなどに代表される近代科学の方法論的意識の高まりとともに、理性の光へと変容し、そのメタファーは、与えられる真理から人間が自ら探求する真理へと意味構造を逆転させた。18世紀の啓蒙主義は、周知のように、文字通り理性によって世界を明るく照らし出す営みであり、カントにおいては「理性のあらゆる歩みをもっとも澄み切った光のなかに見させること」が哲学の「本来的な意図」となって⁷、世界認識のコペルニクス的な転換が図られることになる。

ゲーテにとっては、もはや光がこのような真理のメタファーとして特権的な意味をもつことはなかった。真理そのもののさえ希求するに値しない代物と言えるだろう。「箴言と省察」の中にある次の言葉は、ゲーテが光と真理の関係をどのように見ていたのかを、象徴的に示している。「真理は松明である。しかも巨大な松明だから、わたしたちはみな、目を細め、やけどをしないかと心配までしながら、そのそばを通り過ぎようとする」⁸。松明はいかに巨大とはいえ、人間の手によって地上に灯された炎にすぎない。そのような炎の放つ光にさえ眩惑されてはならないとゲーテは語る。もちろん、「真なるもの」が否定されているわけではないが、ただ、それを直視して、いわば剥き出しのままに掴み取ろうとする認識行為の危険性に警鐘が鳴らされているのである。ゲーテはこうも述べている。『『真なるもの』が具体化されることは必ずしも必要ではない。それが精神のようにふわふわとただよって調和をもたらし、鐘の音のようにおごそかにもやさしく空中をうねってゆくならば、それで充分である」⁹。このようなメタフォーリックに、わたしたちは伝統的な光のメタファーに付与されてきた真理概念に対するゲーテの批判を読み取ることができる。「絶対的なものの中へ身を高め、一つの理念の実現のためにすべてを犠牲にすることがいかに危険なもので

⁴ Hans Blumenberg: Licht als Metapher der Wahrheit. Im Vorfeld der philosophischen Begriffsbildung. In: Studium Generale 1957, Heft 7, 10. Jahrgang.

⁵ Ebd., 433.

⁶ Ebd., 434.

⁷ Kant: Kritik der reinen Vernunft. In: Werke in zehn Bänden, hrg. v. W. Weischedel. Darmstadt 1983, Bd. 4, S. 630.

⁸ Goethe: Maximen und Reflexion (MR) 291, HA XII, S. 406.

⁹ MR 53, HA XII, S. 372.

あるか、ナポレオンがそれを教えている」¹⁰ — ヨーロッパ世界を席卷し、まるでプロメテウスのようにセントヘレナに縛られた同時代人ナポレオンの消息について、晩年のゲーテが語ったとされるこの言葉は、かつて自らプロメテウスの存在に想いを馳せたゲーテ自身の自戒の言葉であつたのかしれない。いずれにしても光そのものが問題なのではないという、あの『色彩論』冒頭の言葉には、ゲーテのこうした反形而上学的な認識論上の基本姿勢が明確に反映されていると言える。

ニュートンは、まさに光そのものを分析対象とした。ゲーテが光をさまざまに条件づけ、そこに生じる現象の多様性に価値と尊厳を認めて観察しようとしたのに対し、ニュートンは、光を屈折率の異なる物質的な粒子に還元しようとした。現象の複雑性を実験的な手法によって単純化し、帰納によって説明する方法論は、近代自然科学の要諦であり、彼の光学研究は、その典型的な範例である。「数学と同じように自然哲学においても、難解な事物の分析的方法による探求はつねに総合的方法に先立つべきである。この分析は、実験及び観察を行い、それから帰納によって一般的結論を導き出し、この結論に対する異議は、実験または他の確かな真理からなされるもの以外は認めないことにある」¹¹。こうした実証的な方法論によって、ニュートンは、あの西欧形而上学の光のメタファーに纏いついてきた真理の 아우ラ を最初に剥ぎ取った自然哲学者と言えるだろう。もちろんニュートン自身は敬虔なキリスト教徒だったから、神を否定しているわけではない。ニュートンにとって、「神はいたるところ事物それ自身に臨在している」¹²のであり、『光学 (Opticks)』は、偽りの神々を信じて自然崇拜をおこなう盲目の異教者を批判する言葉で結ばれている。自然は神が自らの指で書いた書物であるというメタファーもキリスト教神学のトポスであるが、その書物をニュートンは近代科学の方法論によって解読しようとしたのであり、それは、原著者である神の意図を正しく読み取る解釈行為、神への奉仕活動だったと言える。実験を繰り返しながらその観察結果を数式化し、唯一正しい解答をえること、それがニュートン哲学の原理だった。そこに異なる解釈の可能性はない。自然の秩序はあくまでも神の創造の結果であり、「何かこれ以外に世界の起源を求め、あるいは世界を単なる自然の法則によって渾沌から生じたものであらうとみなすことは非哲学的である」¹³から。

原則として実験によって検証された真理以外は認めないという、このような真理の絶対性、排他性を説くニュートンを、ゲーテは『色彩論』のなかで「異端審問官」¹⁴になぞらえた。異端審問官の主要な仕事は魔女の摘発にある。ニュートンが生きた近代は魔女狩りが猖獗をきわめた時代でもあり、1631年、彼が生まれる10年ほど前に匿名で出版された『魔

¹⁰ Goethe: Gespräche mit Eckermann. In: Sämtliche Werke. Münchner Ausgabe 1986, Bd. 19, S. 355f.

¹¹ Isaac Newton: Opticks. Based on fourth edition London 1730. New York 1952, S. 404.

¹² Ebd., S. 403.

¹³ Ebd., S. 402.

¹⁴ Die Farbenlehre, Polemischer Teil, Münchner Ausgabe 1989, Bd. 10, S. 321.

女裁判への警告書』(“Cautio Criminalis”) ¹⁵のなかで、フリードリヒ・フォン・シュペーは、キリスト教真理の名のもとに行われた当時の魔女裁判がいかにおぞましく凄惨なものであったのか、その実態を慎重かつ切々に訴えている。ゲーテが魔女裁判や異端狩り、悪魔学などの資料をかなり収集していたことは、アルブレヒト・シェーネの研究によっても明らかにされているが¹⁶、「最初のヴァルプルギスの夜」という詩では、その真理の教説によって排除された異端の人々が、キリスト教によってでっち上げられた空飛ぶ魔女や悪魔の姿に偽装してキリスト教徒自身を威嚇する場面がアイロニカルに描き出されている。「あの鬱陶しいキリスト教の坊主ども / やつらを思いっきりたぶらかしてやろう / やつらがでっち上げた悪魔の姿でやつら自身を魂消させてやろう」¹⁷。あるいは『ファウスト』の「ヴァルプルギスの夜」の場面でも、最終稿に取上げられなかった遺稿には次のような詩句がある。「血の泉はけっしてひとつじゃない / ほかの小川が流れ込み / 流れは村から村へとうねりながら / 大河となってふくれあがる」¹⁸。魔女狩りのハンドブックともいわれるハインリヒ・クラマーの『魔女への鉄槌』¹⁹やシュペーの証言によると、異端審問はたんなる中傷や噂に基づいて行われることもあったのであり、この詩句は、おそらくそのような流言飛語によって次々に魔女として告発されていった現実の魔女裁判の実相をよく物語っていると言えよう。ゲーテの目から見ると、ニュートンは光を切り刻み、自然を拷問台にかけ、自分が信じ込んだものだけをむりやりに自白させる異端審問官に他ならなかった。しかし、歴史的な魔女狩りの中で果たした異端審問官の役割を考えると、このニュートンに向けられた言葉はほとんど常軌を逸したような苛烈さをもっている。そこにはただニュートンの光の研究手法に対する批判、主体と客観を切り離し、すべてを実験と帰納法によって揺るぎない真理を確定しようとする近代科学の分析的な方法論に対する批判だけではなく、そのような方法論がけっして異質なものと多様なものを許容せず、その必然的に内包する排他性と独善性こそがまさに魔女狩りという近代の暗い裏面史を綴る結果になったのだ、という強い憤りがこめられていたのではないだろうか。

ゲーテは「書物としての自然」というメタファーをしばしば用いた。『色彩論』の緒言には次のように述べられている。「こうした普遍的な記号、自然の語るこうした言語を色彩論にも適用し、この言葉を色彩論によって、つまり色彩現象の多様性によって豊かにふくらませ、拡大し、それによって高度の直観を自然愛好家に伝えることを容易ならしめること

¹⁵ Friedrich von Spee: Cautio Criminalis oder Rechtliches Bedenken wegen der Hexenprozess. Aus dem Lateinischen übertragen und eingeleitet von J-Fr. Ritter. München 2000.

¹⁶ Vgl. Albrecht Schöne: Götterzeichen Liebeszauber Satanskult. Neue Einblicke in alte Goethetexte. München 1982.

¹⁷ Gedichte: Münchner Ausgabe 1986, Bd. 6.1, S. 42.

¹⁸ A. Schöne: a.a.o., S. 189.

¹⁹ Heinrich Kramer (Institoris): Der Hexenhammer. Malleus Maleficarum. Hrg. v. Günter Jerouschek u. Wolfgang Behringer, München 2000.

こそ、本書がまずもって意図したことにほかならない」²⁰。自然という原テキストの言語を一義的に確定するのではなく、逆にその言葉の意味を多義化することこそがゲーテの読み方だった。その際に、原著者がだれで、その意図がどこにあるのか、それは問題にならない。多彩な現象を抽象化せずにただ観ること、「現象の背後になにものをも求めてはならない」²¹ということ、それがゲーテの自然哲学であった。なぜなら、「熟視は観察へ、観察は思考へ、思考は統合へと必ずや移行するものであつて、だから世界を注意深く眺めているだけで、われわれはすでに理論化を行っていると言うことができる」²²からである。この言葉は、自然の光に照らしだされた存在はそれ自体が真理なのだという、ブルーメンベルクがプラトンの光のメタファーについて論じたあのテオリアの認識形式を想起させる。プラトンはしかし、認識対象に真理性を与える太陽の光、すなわちイデアは、その「品位」においても「力」²³においても対象の実在性を遥に超越していると説いた。そこに光の超越性、光の形而上学が生まれることになるわけであるが、この差異は、ゲーテの言葉で語ると「現象の背後にあるもの」と「現象」との関係に置き換えることができる。

ゲーテは決して現象の背後を問おうとはしなかった。ゲーテが問うのは、多様な現象の中に認められる「高度の直観」である。そしてこの高度な直観によって、「根本現象」、「原植物」、「純粋現象」、「原型」あるいは「原像」と、さまざまに言い換えられているゲーテ的認識論の基本概念が生まれることになる。ゲーテの自然認識は、ここが限界点であり、それ以上に先へ遡及されることはなかった。「かりにこのような根本現象が見つけれられたとしても、相変わらず消えることのない悪弊がある。自然研究者は自分が見つけたものを根本現象であると承認しようとはせず、本当ならここに観察の限界があると認めなければならないのに、その背後に、またその上に、それ以上のものを探し出そうとするのである」²⁴。根本現象は、単なる現象でも、また現象を超越した理念的なものでもない。原植物については「超感覚的な原植物の感覚的な形」²⁵、いわば <目に見える理念> であるとも言われているが、こうした基本概念のあからさまな撞着語法にも、あくまで経験領域に踏み止まろうとするゲーテの認識論的立場が如実に現れている。

観察の限界を越えようとする自然研究者の「悪癖」に対するゲーテのこのような批判は、あのデルボイの神託「汝みずからを知れ」という言葉の解釈行為、人間の内的な本質を問い続けてきた西欧哲学の営みにも向けられている。「この際に告白しておきたいのは、わたしには以前から、『汝みずからを知れ』というかの深遠な響きをもつ大きな課題が、人間をいろいろ達成しがたい要求によって混乱させ、外界に対する活動から誤った内的観想へと誘惑しようとする秘密結社の僧侶たちの策略のように、つねにいかがわしく思われていた

²⁰ Zur Farbenlehre, HA XIII, S. 316.

²¹ MR 488, HA XII, S. 432.

²² Zur Farbenlehre, HA XIII, S. 317.

²³ Platon: Politeia 509b. In: Werke, Sonderausgabe, Darmstadt 1990, Bd.4, S. 545.

²⁴ Zur Farbenlehre, HA XIII, S. 368.

²⁵ Morphologie, HA XIII, S. 164.

ことである。人間は世界を知る限りにおいてのみ自己を知り、世界を自己の中でのみ、また自己を世界の中でのみ認識する」²⁶。光とは何かという問いを忌避してその色彩現象の多様性を観察者との相関関係のうちにしようとしたように、ゲーテは人間の自己認識も、「汝とはだれか」という、それ自身の内面に向けられた本質論としてではなく、つねに他者との〈関係論〉として捉えようとした。ゲーテにとっては他者との関係なくしてそもそも己自身を知ることは不可能だからである。しかも、他者の理解それ自体がいかに困難を伴うものであるかということを彼は繰り返し述べてもいる。たとえば、『詩と真実』の中での言葉。「だれも他人を理解できるものではないということ、同じ言葉を聴いてもだれも他人と同じことを考えるものではないということ、一つの会話、一つの読書でも、人が違えばそれぞれに違う考え方を呼び起こすものであることなどを、わたしはあまりにも明白に理解していたのです」²⁷。わたしたちの理解行為は、すべからず「予断 (Vorurteil)」に基づいているという『色彩論』の言葉は良く知られているが、興味深い点は、ゲーテがそこで正しい理解、相手がほんとうは何を意図しているのか、その真偽を問題にしていないということである。「予断とは、真なるものでも虚偽のものでも、要するに自分自身と合致すると感じられるもの一切を求めてやまない衝動であり、われわれ生命体のよろこびに満ちた衝動にほかならない」²⁸。もし予断を超えて普遍に妥当する理解を追求しようとするならば、それはやはり絶対的な真理を求める形而上学の言説とならざるをえないであろう。

それゆえにゲーテが根本現象とは何かという問いを立てることはない。観察の限界点と見なされた根本現象に留まることは、彼にとっては確かに「諦念 (Resignation)」を意味した。しかしそれは同時に「人間性の限界」²⁹であり、その背後へとさらに向かうならば、彼もいわばあのいかがわしい「秘密結社の僧侶たち」と同じ轍を踏むことにならざるをえないのである。ある会話では、神自身でさえわたし以上に根本現象を知っているわけではないというゲーテの言葉も伝えられている³⁰。根本現象は、現象によって開示される直観と言われているが、しかし、その直観にさえ彼は「不安」や「畏れ」を覚えると言う。「根本現象がわたしたちの感覚に対して裸のまま出現すると、わたしたちは一種の物怖じを感じ、不安にさえ襲われる」³¹。ゲーテの関心は、根本現象それ自体の直観に向けられているのではなく、それは、あくまでも経験世界のうちに知覚されるさまざまな現象との相関関係において理解されなければならない。なぜなら「経験という永遠の戯れによって生気を与えられた場合にのみ、根本現象はわたしたちを喜ばせる」³²からである。

わたしたちは、この「経験という永遠の戯れ」と根本現象との関係を、「メタモルフォー

²⁶ Zur Naturwissenschaft im allgemeinen, HA XIII, S. 38.

²⁷ Dichtung und Wahrheit, Vierter Teil, 16. Buch: HA X, S. 78.

²⁸ Die Farbenlehre, Polemischer Teil, Münchner Ausgabe 1989, Bd. 10, S. 288.

²⁹ MR 20, HA XII, S. 367.

³⁰ Goethe: Goethes Gespräche, Artemis-Ausgabe, XXIII, S. 87.

³¹ MR 17, HA XII, S. 367.

³² Ebd., MR 16.

ゼ (Metamorphose)」と「原植物」との関係に置き換えることもできる。周知のようにゲーテの植物学研究は、これら二つの基本概念を軸に展開されており、メタモルフォーゼについては次のように述べられている。「メタモルフォーゼの理念は天からのきわめて貴重な賜物であるが、同時にたいへん危険な賜物でもある。それは無形式なものに通じ、知識を破壊し解消させてしまう恐れがある」³³。それに対して、原植物は、植物形態のまさにカオスへと拡散するよう見えるメタモルフォーゼの危険性に対する拮抗力として措定されている。しかし、それは、植物の多様性をいわば一種の本質直観によって単純化する還元原理ではない。原植物それ自身が「プロテウス」のように変身する契機を含んでおり、それゆえにまた把握しがたい直観だと言われているのである。「原型」という言葉を使っているが、ゲーテはこの問題を植物学のなかで次のように述べている。「自然に対し永遠の必然性によって定められている原型がたいへんなプロテウスであるため、自然は属と種を生み出すことができるのであるが、その変化があまりに激しく、きわめて鋭敏な比較能力の高い感覚の前からもその原型は姿を消してしまい、ほんのわずかに部分的に、しかもいわば矛盾の中ですばやくとらえることしかできない。そのために、このような原型を定めることが困難なのである」³⁴。形式を破壊し知識を解体するメタモルフォーゼの危険性について語る一方で、原型にこのようなプロテウスの性格を認めるという、これら両者のパラドキシカルな関係に、わたしたちは、けっして超越的な形而上世界へ飛躍しようとせず、あくまでも経験という永遠の戯れに遊ぶとするゲーテの姿を捉えることができる。

この際限のないメタモルフォーゼの世界にゲーテが見たものは、ただ一つ、すべての現象に認められる類縁性だった。「真理は神のものと同じで、われわれにはけっして直接に認識できない」という有名な一節にもあるように、人間が認識しえるものは「その残照、例示、象徴といった個別の類縁現象」³⁵に過ぎない。ゲーテのこの基本的な認識論は、とりわけ「アナロジー」の概念に対する彼の積極的な評価に示されている。「アナロジーには、議論を打ち切らず、本来、最後のものを求めないという長所がある。それに反して帰納法は、立てた目的にばかり目をそそいでがむしやに突き進み、まちがいの真実もいっしょに引きずっていくから危険である」³⁶。ニュートンは、光の実体を解明するために、実験と観察、そしてそこから帰納法に基づいて一般的結論を引き出そうとした。それは近代自然科学の原理的な方法論であるが、ゲーテはそこに、観察主体との相互関係のうちに生じる不確定要素を捨象し、あらかじめ特定の現象のみを解明するために実験装置を設定してその目的のためには不都合な観察データを隠蔽してしまうという、一つのテロスに向かって利用される帰納法の危険性を見たのである。しかし、ゲーテにとって個々の自然現象は、「存

³³ Zur Naturwissenschaft im allgemeinen, HA XIII, S. 35.

³⁴ ゲーテ：『ゲーテ全集』第14巻、「植物学」野村一郎訳、潮出出版1980、124頁。

³⁵ Zur Witterungslehre, HA XIII, S. 305.

³⁶ MR 26, HA XII, S. 368f.

在総体のアナログン」³⁷に他ならなかった。それゆえにすべての現象は「親縁関係」のうちに考察されなければならないのであり、特定の「ある現象だけに執着したり、拘泥したり、それを孤立したものとして観察したりするのではなく、どこかに近似したもの、親縁関係にあるものがないかどうか、自然全体のなかを見渡してみなければならない」³⁸。存在の総体性は、諸現象の類似性を考察するアナロジーの原理によってのみ認識されうるのである。このような考察方法は、現象の多様性を切り詰めてある一点に収斂させることはなく、つねに終わりのない現象の連鎖を引き起こす。アナロジーは、究極的な結論、けっして「最後の言葉」を求めようとはせずに関かれた議論を展開しつづけるのである。

しかし、そのアナロジーについてゲーテはこうも語る。「アナロジーをあまり強く推し進めれば、すべてが同一のものに帰着する。アナロジーを避ければ、すべてが無数のものに分散する。どちらの場合にも考察は停滞する。一方では考察があまりにも度を越すために、他方ではそれが殺されてしまうために」³⁹。わたしたちはここでゲーテが原植物のなかに「植物のあらゆる部分の根源的同一性」を見ていたことを想起する必要がある。「わたしはいまやいたるところでこの同一性を追及し、また知覚するにいたった」⁴⁰。彼はまた、原植物の着想をえたときの心境を次のようにも述べていた。「原植物とは、世にも不思議な被造物で、自然でさえ、これを発見したわたしを羨んでしかるべきだ」⁴¹。しかし、アナロジーを突き詰めることによってえられる「同一性」それ自体は、ここでは考察の「停滞」を引き起こすと言われているのである。原植物の「根源的な同一性」もその例外ではないだろう。あるものの同一性を確定することは、そのものの最後の言葉が発せられることを意味し、そこにはもはや思考のダイナミズムは生まれてこない。また、逆にアナロジーの視点を欠くと、本来、存在総体のアナログンであるはずの諸現象はその類縁性を断ち切られて無数のものに分散し、ただ差異だけが支配する世界とならざるをえない。ゲーテは、その際限なき現象の戯れを語る言葉が、脈絡を失い、完結することのない記号の戯れとなって拡散せざるをえない事態まで全面的に受け入れることはできなかった。それゆえにメタモルフォーゼの理念をカオスへと通じる「危険な賜物」と見なしたのであり、同時に原植物のうちにすべての植物の根源的同一性を認めながらも、それをプロテウスのようなメタモルフォーゼの契機として捉えたのである。ゲーテの反形而上学は、この同一性とメタモルフォーゼのきわめてアンビヴァレントな緊張関係の上に成り立っている。その関係を端的に示している言葉の一つがアナロジーに他ならないと言えよう。

(北海道大学文学研究科・教授)

³⁷ Ebd., MR 23.

³⁸ Zur Farbenlehre, HA XIII, S. 380.

³⁹ MR 23, HA XII, S. 368.

⁴⁰ Morphologie, HA XIII, S. 164.

⁴¹ Italienische Reise, HA XI, S. 324, S. 375.